

『ナルニア国年代記』における子どもたちの成長

その1 『ライオンと魔女』におけるエドモンドの成長

野呂有子

「ナルニアの国」は、われわれの住むこの宇宙空間には存在しない。それは魔法によってのみ行くことのできる「別世界」である。¹そこには、物言うけものたち、物言う木々、巨人や小人、神話に登場するフォーンやセントール²たちが住んでいる。

「ナルニアの国」は、こうした生きものたちのものであり、人間のものではないが、人間が王となることによって初めてうまく治まる国でもある。³それは、この国の創造主アスランが定めた掟である。⁴

しかし、ナルニアの創造の時、既に悪がこの国に入り込んでおり、⁵その力はこの幸いの国に不吉な影を投げかけ、この国を転覆せんものと機をうかがっている。そのためにナルニアが危機に陥る時、人間の子供たちはアスランに呼ばれ、その魔法によってこの国に連れてこられる。そして、子供たちは、住民と力を合わせ、アスランに導かれながら、悪と戦い、悪に打ち勝ってナルニアに正義と秩序をとり戻す。

ところで、悪と戦うために呼ばれる子供たちは、どのような性質の持ち主であろうか？彼らは皆、非のうちどころのない善良な子どもなのだろうか？答えは「否」である。『ライオンと魔女』に登場する四人兄弟の一人、エドモンドは裏切って魔女に味方し、アスランと自分のきょうだいをのびきならぬ窮地に陥れる。『朝びらき丸 東の海へ』に登場するユースタスは絶えず不満を口にし、皆から嫌われる。『銀の椅子』に登場するジルは、アスランとの約束を忘れ、自分や仲間を危険にさらす。『魔術師のおい』に登場するディゴリーは好奇心のために魔女を眠りから呼びさまし、ナルニアに災いの元凶を持ちこむのである。他の子供たちもまったく完全とは言い難い。ものごとが思い通りに運ばぬ時、それを他人のせいにしたり、いさかいを起こしたりする。最も理想的な人物として描かれるルーサーでさえも、時にはまちがいを犯しアスランにたしなめられる。⁶

しかし、彼らはいつまでもそうした状態にとどまっているのではなく、様々な事件を通して成長していく。⁷悪との戦いの中で、自分の誤ちを認め、欠点を克服していくのだ。

この論文においては、子どもたちがどのような契機を経て、どのように成長していくかを見ていきたい。

□. 『ライオンと魔女』におけるエドモンドの成長

ナルニアに呼ばれた子供たちの中でも、エドモンドほど変貌を遂げたものも珍しいのではないだろうか。彼は『ライオンと魔女』においては裏切者となり、ナルニアとアスランを危機に陥れる。しかし、やがて回心し、魔女との戦いでは大きな働きをする。そして『カスピアン王子のつるぶえ』では、思慮深く自分をおさえた行動のとれる少年に成長し、『朝びらき丸 東の海へ』では、ユースタスにアスランの存在を教え、カづけるまでになっている。ここでは、主に『ライオンと魔女』におけるエドモンドの行動を通して、その成長の過程をあとづけていく。

(□)意地悪なエドモンド

エドモンドは、「いつだって自分よりも小さいものに対しては好んで意地悪をする」少年だった。⁸妹のルーサーが魔法のたんすを通してナルニアへ行ってきた時、話をろくに聞きもせず彼女を気遣い扱った。これは、年長のピーターとスーザンが半信半疑ながらも一応ルーサーの話をきき、衣装だんすの中を確かめているのとは対照的である。しかし、この時には、たんすは普通のたんすに戻ってしまっていてルーサーの話は信じてもらえない。すると、エドモンドは、

¹ C.S. Lewis, *The Magicians' Nephew* (1955; rpt. Harmondsworth: Penguin Book Ltd., 1979), p.25.

² faun はローマ神話で半人半羊の林野牧畜の神, centaur はギリシャ神話で半人半馬の怪物。

³ C.S. Lewis, *The Prince Caspian* (1951; rpt. London: William Collins Sons & Co. Ltd, 1980), p.65.

⁴ 柳生望, 『ナルニアの国は遠くない』新教出版社, 1981年, p.49.

⁵ *The Magicians' Nephew*, p.111.

⁶ C.S. Lewis, *The Lion, the Witch & the Wardrobe* (1950; rpt. Harmondsworth: Penguin Books Ltd. 1979) p.163; *The Prince Caspian*, p.124 et al.

⁷ 柳生望, pp47-102; 山形和美編著『C.S.ルイスの世界』こびあん書房, 1983年, p.108.

⁸ *The Lion, the Witch & the Wardrobe*, p45. 以下, 引用文の訳はすべて筆者による。又, 日本語の題名については, 故瀬田貞二氏のもの(岩波書店発行)を採用させていただいた。

力を落としているルーシーに、家中の他の戸棚について「何か別の新しい国があったかい？」⁹とわざとたずねてはからかうのだった。

ある雨の日、子どもたちは「かくれんぼ」をする。たまたまルーシーが問題の衣装だんすに入って行くのを見たエドモンドは、自分もあとから入っていく。

たんすに入る二人の動機を、作者 C・S・ルイスは対照的に描いている。ルーシーは、ナルニアや友だちになったフォーンのことに確信がもてなくなり、もう一度、是非中を見てみたいと思ってたんすに近づいて行く。そして、うしろから足音がきこえてきたので、止むなく中にとびこむ。これに対し、エドモンドは、ルーシーをそのナルニアのことでもっとからかかってやろうと思って後に続く。

つまり、ルーシーは事実を確認したいという気持と外的な必要に迫られて行動するのだが、エドモンドのほうは「悪意」にもとづいて行動する。¹⁰

彼はたんすにとびこみ「それがどれほど愚かなことかも忘れて」¹¹とびらをしめてしまう。ルーシーはたんすに入るときは必ずとびらを少しあけている。後に四人でたんすに入るときも、ピーターは「思慮深い人間ならだれでもするよう」¹²とびらを少しあけておく。このように、作者は、子どもたちの行動の細部にまで行き届いた描写を積み重ね、それによって、実にさりげなく、それぞれの子どもの特質を浮き彫りにして見せてくれる。

こうしてエドモンドはまったくその存在を信じていなかったナルニアの国へ自らの悪意のゆえに入っていくことになる。

毛皮のつるされたたんすが、いつの間にか雪におおわれた森へと続き、エドモンドは驚くと同時に、ルーシーが正しかったことを知る。彼女が近くにいると思いき名前を呼ぶが返事がない。そこでエドモンドはいかにも彼らしい事を考える。つまり、ルーシーはすぐ近くにいるのに、今までのエドモンドのしうちに腹をたてていて、すねて出てこないのだと。

実はルーシーはタムナスを訪問しているのだが、彼はそうは考えない。自分が事実誤認をしているとは気づかず、それに主観的な(誤った)判断を下している。悪意に満ちた人間の心には、他人の行動も同じように悪意に満ちたものに思えるのだろうか。

(□)エドモンドと魔女の誘惑

帰ろうとした時、遠くから鈴の音が聞こえてくる。それは次第に近づき、やがてそりに乗った白い魔女が姿をあらわす。まるで彼の邪悪な心に感応してやってきたかのごとくである。その顔は美しかったが、異常なほど白く、冷たく高慢で陰しい。彼女はエドモンドが人間の子供であることを知ると、その杖をふり石に変えようとする。しかし、かれがたった一人であり扱いやすそうなので、考え直す。彼を利用して他の三人をおびき出そうと思ったのだ。

ここから魔女の誘惑が始まる。まず、寒くてかわいそうだからと言ってそりの上の自分のそばに来させる。さらに暖かい飲みものを与え、言葉たくみに菓子を与える。このあたりの描写は、『ヘンゼルとグレーテル』の魔女の誘惑の場面を思わせる。あの魔女も、子どもたちを菓子でおびき寄せ、ごちそうを与え、やがて太らせて餌食にしようとしたではないか。

だが、愚かなエドモンドは警戒もせず菓子を口ににする。食べ出すと止められず、菓子を貪りながら魔女の質問に答え続ける。口の中に食べものを入れたままでしゃべるのは行儀が悪い、ということもいつの間にか忘れていた。ここでは、エドモンドが誘惑に負け墮落していく様子が、幼い読者にも理解し易い具体的な調子で語られている。

あれほどルーシーに反発したエドモンドは、その存在すら信じなかったナルニアで、魔女に対して何の疑いも抱かずに、菓子の甘さに我を忘れて、自分のきょうだいのことや妹の友達のことすべて話してしまう。友達というものが子どもの世界では、しばしば一般の大人の世界でそうである以上に重大な意味をもっていることを考えると、エドモンドの犯した罪の重さも明らかであろう。

実は、彼の食べている菓子には魔法がかかっていて、それを一度口にしたらものは食べれば食べるほど、ますます多く欲しくなる、というしるものであり、ほうっておけば食べ過ぎて遂には死んでしまうという恐ろしい菓子であった。

一箱全部食べてしまい、まだ欲しそうにしているエドモンドに対し、魔女は他のきょうだいをつれてくるようにと言う。そうすれば菓子をもっとやるというわけだ。菓子をこの場でやらないその口実として「魔法はたった一度しかつかえないんだよ。だが私の館ではまた別の話だ。」¹³という。

すると、菓子の魔力にとりつかれてしまったエドモンドは「今、いっしょにあなたの所にいけばいいじゃないですか。」と執拗にいきがる。彼は最初そりに乗った時はどこか知らない所へ連れていかれるのではないかとびくびくしていたのに、今は

⁹ *Ibid.*, p.29.

¹⁰ *Ibid.*, p.45.

¹¹ *Ibid.*, p.30.

¹² *Ibid.*, p.52.

¹³ *Ibid.*, p.38.

「その恐怖も忘れてしまった。」¹⁴ エドモンドはたんすの戸を少しあけておくことを「忘れ」、行儀作法を「忘れ」、魔女に対する恐怖を「忘れ」ている。彼は人間としてあるべき姿を忘れ、次第に自分自身を見失っていくのである。

魔女は更にエドモンドの自尊心をくすぐって墮落を決定的なものにする。自分にはあとつぎになる子供がいない。ところでおまえは自分が今までに会ったこともないような利口な、姿もりっぱな子供だからおまえを王子にしたいと思う、というわけだ。しかし、「どうして今すぐじゃだめなんですか？」というエドモンドは顔がほてっており、¹⁵口と手は砂糖でべたべた、どう見ても利口とは言えず姿もよくない。

そして、きょうたいを王侯貴族にしてあげるから連れてくるようにといわれて、「あいつらなんか、どこといってとりえもありません。」と言う時、エドモンドはまさに身のほど知らず、傲慢のかたまりである。傲慢は「本質的な悪徳、究極的な悪」であり、

これに比べたら、不貞とか怒り、貪欲、醜態とかいったものは、ノミに食われた程度のささいなことにすぎない。悪魔が悪魔になったのも高ぶりのゆえであった。高ぶりは人を他のすべての悪へと導いていく。それは完全に反神的な心の状態である。¹⁶

魔女は最後に、自分のことは二人だけの秘密にしておくこと、ルーシーがフォンから自分について妙な話をきいているかもしれないがそれは信じないように、と言い置いて去る。

ちょうどそこへ戻ってきたルーシーは、魔女の正体についてフォンから聞いてきたことを話す。だが、「すでに半分以上魔女の側についてしまった」¹⁷ 彼はとり合おうとしない。大人ぶった口調で「フォンなんてものの言うことはあてにならないさ。」と答える。¹⁸正しいものの存在を信じようとしなかったエドモンドは、結局、悪の側につくことになってしまった。

(□)嘘をつくエドモンド

ルーシーは、これでピーターとスーザンにもようやくナルニアの存在を信じてもらえると思って大喜びするが、エドモンドは、卑劣にも「ごっこ遊び」をしていただけだ、と嘘をつく。彼はますます卑劣な人間に成り下がっていく。

絶望して部屋を飛び出していくルーシーに追打ちをかけるように悪態をつき、「あれだから小さい子ってのは困るんだ。あいつらはいつだって……」と一般化してごまかそうとする。魔女と出会ったあとのエドモンドの言葉には、「フォンなんてものは……」、「そんなこと誰でも知っているさ。」¹⁹など、妙に大人びた、曖昧な言い方がめだっている。それは、魔女の「フォンなんてものは何をいい出すか分かったもんじゃない」²⁰という言葉に呼応する。これに対してルーシーは、皆が何とも思っても自分がナルニアへ行ったのは確かだと主張する。そのために気違いになったと思われてもルーシーは本当のことを言うのを恐れはしない。

(□)傲慢なエドモンド

とうとう四人が止むを得ずたんすの中へ入り、そのままナルニアへ行く日がやってくる。

ナルニアの国が実在することを知った時のピーターの態度はエドモンドとは対照的に描かれる。彼は素直にその非を詫び、ルーシーに握手を求める。ピーターは幼い妹を一個の独立した人格として尊重している。エドモンドが自分の優越性を誇示しようとしたのとは大違いだ。

さて、森の中を歩くうち、エドモンドはうっかり口をすべらせて以前にもここへ来たことをしゃべってしまう。そして、ピーターに厳しく叱責されると、反省するどころか、次のように心に誓う。

「みんな、このおかえしはさせてもらうぞ。お高くとまった、ひとりよがりのいい子ちゃんぶりやがったやつらめ。²¹」と。

四人はルーシーを先頭にしてフォンのタムナスの住む洞穴を訪ねることにする。だが、そこで彼らを待っていたのは、めちゃくちゃにこわされた家具調度品と魔女の秘密警察所長官が書き残したタムナスの罪状書だった。タムナスはルーシーを逃したことがエドモンドから女王に伝わり、そのために捕えられたのだった。

タムナスを助けなければならない、彼は命の恩人だから、というルーシーに向かってエドモンドはろくに食べる物も持って

¹⁴ *loc. cit.*

¹⁵ 蛇の誘惑に負けて禁断の木の実をたべたイヴの頬も赤らんでいた。cf. John Milton, *Paradise Lost* ix.887.

¹⁶ C.S.ルイス著、柳生直行訳『キリスト教の精髓』新教出版社、1984年、p.192.

¹⁷ *The Lion*, p.42.

¹⁸ *loc. cit.*

¹⁹ *loc. cit.*

²⁰ *Ibid.*, p.40.

²¹ *Ibid.*, p.55.

きていないのにどうやって助けるというんだ、と反対する。自分が魔女に余計なことを言ったためにタムナスがこのような目にあっただとは彼は考えていない。今の彼には良心のひとかけらもないようだ。

やがて、四人の前にこまどりがあわれ、後についてくるように合図する。エドモンドはピーターに「あの鳥が敵か味方がどうしてわかる？ 罾かもしれないじゃないか。」と言う。²²ピーターがこまどりが悪の側につくわけがない、といなすと、「フォーンたちが正しくて女王(彼女が魔女だと言われてきたけど)が間違ってるってどうしてわかる？」、「(ルースイーを助けたというけど)フォーンがそう言ってるだけじゃないか。」と疑惑をおこさせようとする。

しかし、エドモンドの言葉が、たとえ、一見もっともらしく見えても、実はあてにならないことは明らかだ。タムナスが「人間と通じた」ために逮捕されたこと、人間が「女王陛下の敵」であることは、洞穴に残された罪状書に記された通りなのだから。又、裏切者はこうなるぞ、とばかりにうちこわされた家具やナイフで切り裂かれた写真は、女王(=魔女)の残酷さを如実に示している。

こまどりは、四人をビーバーの所までつれていく。ビーバーはしきりに自分の後についてくるようにと合図するが、エドモンドは又も「(あれが良いビーバーだと)どうしてわかる？」と言う。子供たちはビーバーにかけることにする。

ビーバーがアスランの名を口にした時、エドモンドは「不可解な恐れ²³」を感じる。他の三人の子どもたちが、勇敢になったと感じ、大きな喜びを感じたのとは対照的である。

ビーバーに案内されて行く途中、エドモンドは魔女から教えられた館への目印に気づき、魔法の菓子のことと王位につくことに思いをはせる。彼が貪欲の罪と傲慢の罪とのとりこになっていることが端的に示される箇所である。

ビーバーの家について一行は、心のこもったごちそうでもてなされる。とりたての魚、ゆでたてのじゃがいも、焼きたてのマーレードのねじりパン、そして暖かいお茶。エドモンドを除いた三人の子どもたちが、実にさり気なく、ごちそうのしたくを手伝っていることにも注意したい。

夕食後、ビーバーは、アスランが海のかなたの大帝の一人子・偉大なライオンであること、そして、明日、石舞台の所で子どもたちは彼と会うことになっていることを話す。一刻も早くタムナスを助けたい、とルースイーが言うと、ビーバーは、アスランに会いに行くことこそタムナスを助ける一番の早道なのだとさす。²⁴更に続けて、魔女は人間のように見えるが、実は巨人の血がまじっており、正当な王位継承者ではないこと、そして、予言によれば、ケア・パラヴェルの四つの王座に四人の人間の子どもが座る時魔女の終りがくる、だから魔女は子どもたち四人のことを知れば生かしてはおかないだろう、と語る。

しかし、エドモンドは話の途中で抜けて魔女のもとへおかう。彼はこれまでも相手の話を最後まで聞かなかったり、まともに聞かなかったわけだが、ここでも、本当に自分に必要な情報を得損なった。そして裏切者となった。

エドモンドは、あの心のこもった夕食も、魔法の菓子のことで頭が一杯で、心から楽しむことができなかった。その後の会話でも、自分ひとりがのけ者にされて冷たくあしらわれていると考えていた。実際にはそうではなかったのにそう思いこんだ。自分のきょうだいを石に変えてほしいとまでは思っていなかったが、ただただ菓子が欲しくて、王子になりたいくて、そして、ピーターに自分をののしたしかえしをしてやりたかった。そして、自分が一番えらくなりたかった。他のきょうだいに自分と同じ位えらくなくてほしくなかった。²⁵

そして、魔女はそんな悪者ではない、少なくとも自分にはあれほどやさしかったではないか、と思ひ込もうとする。「ともかくも、あの恐ろしいアスランよりはましだろう。」²⁶しかし、彼も心の奥底では、白い魔女が悪者であり残酷であることに気がつき始めている。

コートもなしで又降り始めた雪の中を歩くエドモンドの姿はみじめである。彼はくじけそうになりながらも王になった時のことを考えて自分を励ます。まず道路をつくり、次にビーバーを規制する法をつくり、最後にピーターを低い身分のままにする計略を思いつく。彼の邪悪な思いを徴らすかのように冷たい風が吹きつけ、身体が濡れ、雪の固まりが落ちてきてもひるまない。彼はますますピーターに対する憎悪を燃やし、これも皆ピーターのせいであるかのごとくに思う。この部分は、後にア

²² *Ibid.*, p.59.

²³ 邪悪な魔法使いの Andrew や魔女の Jadis もアスランの歌声を聞いて不快な気持ちになる。cf. *The Magicians' Nephew*, p.95.

²⁴ cf. 『キリスト教の精髓』pp.339-340.「……何もかも差し控えてはならない。あなたが捨てなかったものは何にせよ、ほんとうにあなたのものとなることはできない。……しかし、あなたがキリストを求めるなら、あなたはキリストを見出し、そのおまけとして、万物をも見出すのである。」

²⁵ cf. C.S.ルイス著 蜂谷昭雄・森安綾共訳『悪魔の手紙』新教出版社、1983年、p.6; 『キリスト教の精髓』p.193.「最大の罪」である傲慢が、今、はっきりとエドモンドの中に認められる。

²⁶ *The Lion*, p.83. 又、エドモンドのこの言葉は『カスピアン王子のつのおえ』でニカブリクの言う「誰だろうと何だろうとその存在をおれは信じるとも。……誰だろうと何だろうと、つまりアスランであろうと白い魔女であろうとね。」という言葉に通ずる。

スランに会った時のピーターの「(エドモンドの裏切は)ぼくのせいでもあるんです。ぼくは弟に腹をたてていた。それでますます悪い方へ行ったんだと思います。²⁷」という言葉と鮮やかな対照をなしている。

(□) 魔女との再会

やがてエドモンドの目にうつった魔女の館は、針のように鋭く尖った塔のある城で、円錐形の帽子のようだった。これは、傲慢を象徴しているといえよう。²⁸彼はこの館に恐怖を抱き始めた。しかし、戻ることはもうできなかった。

やっと城の中庭に入ったエドモンドはそこで多くの石像を目にする。これは皆、魔女が石に変えた生き物たちだった。その中にライオンの石像がある。エドモンドは、最初これが生きたライオンだと思い恐怖におののくが、やがて石像であることに気付く。彼は、これをアスランのなれの果ての姿だと、手前勝手に解釈し、赤鉛筆でひげと目鏡を書いてからかう。が、それも空しい。ライオンの顔はいかにも悲しげで、怖ろしく、又、気高かった。

城の入口に巨大な狼がいる。エドモンドはこれも石像だ、と自分に言い聞かせ通り過ぎようとする。そのとたん起き上がった狼は魔女の秘密警察所長官のモーグリであった。

先には石像のライオンを生きたものと間違え、今、生きた狼を石像と間違える。これは、エドモンド自身が今まで選択してきた道が誤っていたことと符合する。彼は、自分に無害なものを恐れ、恐れなくてはいけないものを無害だと思い込んできたのだった。そして、今、少なくとも石像に関する限りは自分の判断が間違っていたことを二度続けて思い知ったはずだ。

城の中の薄暗い廊下にも石像が並んでいる。ドアの近くの石像を見て、さすがのエドモンドも、これがルースイーの友達フォーンではないか、と考えざるを得ない。フォーンの顔も悲し気だった。

エドモンドから子どもたちのこととアスランのことを聞いた魔女は、すぐに櫂を用意させる。彼女はエドモンドにはもはや何の関心も示さない。彼が菓子を取ると、「だまれ、たわけものが！」²⁹と言う。利用価値のなくなった者は歯牙にもかけぬ徹底したエゴイズムがうかがえる。これは裏切者であっても、ともかくあれは弟なのだと言ってピーターが彼を助けに行こうとしたのを思い合わせるとき、一層鮮明になってくる。

これからの出来事はエドモンドにとっては失望の連続となる。

魔女は、いったんはどなりつけたものの、エドモンドにもまだ利用価値が残っていることに気づき、「食べ物と飲み物」³⁰を与える。これは鉄の器にいれた水とひからびてかび臭いパンだった。ビーバーの家での食事とは何という違いだろう。

ビーバーと共にした食事は豪華でもなければ贅沢でもなかった。しかし、それは新鮮で心がこもっており、恵みと喜びにあふれていた。これに対し、魔女の与えたものは飲み込むことすら困難であった。作者ルイスはこの二つの対照的な食事を通して、アスランの側につくものの豊かさと魔女の側につくものの貧しさを具体的に示しているといえよう。

降りしきる雪の中を外套もなしで女王と櫂のつたエドモンドは惨めだった。雪は服についてとけて、しみとおり、まもなく彼はずぶぬれになってしまう。今まで魔女が自分を後つぎにする様子もなく、魔女の側が正しいという考えもあやしいものになる。走り続ける櫂の上で、エドモンドはすべての望みが奪われた今、すべて夢であればよいと願うのみだった。

魔女と再会したあとのエドモンドは魔法の菓子ももらえず王になる望みも失われた。しかし、この失望の過程は、又、エドモンドが魔女の正体を認識する過程でもある。彼は冷遇されながら次第に人間らしい気持を取り戻していく。

(□) エドモンドの回心

やがて雪は止み夜が明ける。彼らは、りすの家族とサター³¹たちが愉快地クリスマスをお祝しているところにぶつかる。長い間雪に閉ざされてクリスマスのこなかったナルニアに遂にサンタ・クロースがやってきて動物たちにクリスマスのごちそうをプレゼントしてくれたのだった。これは魔女の呪いがやぶれ始めている証拠でもあった。怒り狂った彼女は、エドモンドがとめるのも聞かず、杖をふって動物たちを石にしてしまう。エドモンドはここで初めて自分以外の生きものに憐れみの心を抱くのだった。

エドモンドは初めて魔女が生きものを石に変える現場に立ちあった。「裏切者」とか「スパイ」とか呼ばれるものがまったく罪のない善良な生きものであることを知った。彼は魔女の行為を黙って見ていたのではない。我を忘れて「ああ、やめて、

²⁷ *The Lion*, p.118.

²⁸ cf. ミルトンは『教会統治の理由』(1642)の中で“...her pyramid aspires and sharpens to ambition...”と言って、ピラミッドの形を野心の象徴としている。cf. Don M. Wolfe, gen. ed. *The Complete Prose Works of John Milton* (New haven, Conn.: Yale University Press, 1953—) 1: 789-90.

²⁹ *The Lion*, p.102.

³⁰ *loc. cit.*

³¹ satyr はギリシャ神話で酒神 Bacchus に従う半人半獣の怪物で、酒と女が大好きな山野の精。

やめて、お願いだからやめてください。」³²と叫んでいる。そして、気が遠くなるほど強くたたかれる。

エドモンドはもはやあの卑劣な少年ではない。彼はぶたれた後も、自分のことではなく、動物たちのことを憐れんでいる。他人のために行動し、他人のために心を傷めることのできる人間になっている。これは、魔女とははっきり袂を分かった証でもある。

自分のせいで、きょうだいの中で一人だけサンタ・クロースから贈り物をもらえなかったエドモンドは、ここで何にもまさる贈り物を得たと言えないだろうか。人間としてあるべき姿—これこそエドモンドに与えられた贈り物である。そして、彼に最も必要なものだった。

(□)エドモンドと春の訪れ

アスランが動き始め、ナルニアの国では春が冬にとって代わっていく。その様子をエドモンドの視点に立って描く作者の筆は冴える。我々はこの物語の中の最も美しい場面の一つに遭遇する。

エドモンドは雪が水っぽくやわらかくなってきたのに気づく。そりが進まなくなる。それは雪がとけて地表があらわれてきたせいだということが彼に分かる。彼の耳には聞き慣れぬ心地よい、さらさらという音が聞こえてくる。それが雪どけ水の流れる音だと知って彼の心は喜びに躍る。目の前の木の枝から雪のかたまりが落ち、彼がナルニアに来て以来初めて緑の葉が姿をあらわす。エドモンドとともに我々もこの鮮やかな白から緑への変換にしばし心を奪われる。

ついにそりは動かなくなる。彼は後手に縛られ歩かされる。

木々は次々に雪の衣をふるい落としした。……もやが白色から黄金色に変わり、やがて消え失せた。喜ばしい陽光が矢のごとくに森の地面にふりそそぎ、梢からは青空がのぞいていた。³³

春に先がけて咲く可憐な黄色い花セランダイン、希望と慰めを象徴するスノー・ドロップ、黄金色と紫と白色のクロッカスが咲いている。エドモンドは、身にさし迫っている危険にも拘らず、心からこの景色を楽しんでいる。かって彼がビーバーの家での食事を心から楽しむことができなかつたのと比べると、いかに靈的成長を遂げたかが明らかになるであろう。なぜなら、

現在こそ時が永久にふれる接点であるから。

……感謝は過去を見、愛情は現在を見、恐怖、貪欲、情欲、野心は未来を見る。³⁴

エドモンドは今、春の訪れの中に永遠なるもの(ニアスラン)を見ている。小人や魔女にせきたてられ罵られても見つづける。見ずにはおれないのだろう。

鳥がさえずり、森中が鳥の歌でなり響く。空はますます青くなり、さくら草が咲き、そよ風が甘かくわい香りを運んでくる。白一色だった世界が色鮮やかに生まれ変わり、万物が活動を再開する。この様子をルイスはエドモンドの視覚と聴覚、そして嗅覚を通して我々に生き生きと語っている。

アスランの力はナルニアに春をもたらすとともにエドモンドの心にも大きな変化を与えたと言えよう。

(□)アスランとエドモンド

敗北を認めぬ魔女はエドモンドを殺してしまえば予言の成就を阻止できると考えて、彼を木に縛りつけナイフを研ぎ始める。そこへピーターや味方の動物たちがやってきてエドモンドは救い出される。

翌朝早くエドモンドはアスランとともに歩きながら話をする。その話はエドモンドにとって決して忘れられぬものとなる。アスランに導かれてきょうだいのところへやってきた彼は、一人一人と握手して一人一人に詫びる。彼らは和解する。

しかし、魔女はナルニア建国時の大帝の掟をもち出し、裏切者(ニエドモンド)は自分の餌食だと主張する。魔女とアスランのやりとりを聞くエドモンドの姿をルイスは以下のように描いている。

……エドモンドは今までにさまざまなことを経験し、その朝(アスランと)話をした後では、自分のことはまったく考えなくなっていた。彼はただアスランを見つめていた。……彼は息苦しくなり何か言うべきかと迷った。しかし、すぐに、自

³² *Ibid.*, p.106.

³³ *Ibid.*, p.110.

³⁴ 『悪魔の手紙』pp.96-98.

分はただ待っていればよいのだ、そして言われたとおりにすればよいのだ、と感じた。³⁵

これは、詩篇 37 篇 7 節、「主の前に静まり、耐え忍んで主を待て。」を思いおこさせる。³⁶エドモンドは今、忍耐の徳を学びつつあると言えよう。

大帝の定めた掟にはアスランといえどもさからうことはできない。遂にアスランは自らエドモンドの身代わりとなることを申し出て魔女を納得させる。そして、その夜、彼は秘かに魔女のもとへ出向いていく。

魔女がどれほど残酷なやり方でアスランを殺したか、又、アスランがいかんにして復活したかは、柳生望氏の本に詳しく論じられているので、³⁷ここでは省略する。

悪の虜となったエドモンドが自力でその手から逃れられなかったこと、彼の釈放もナルニアの救済も、アスランによらなければならなかったことは確かである。³⁸だが、エドモンド自身も救われるにふさわしい人間たらんと努力していることに注意したい。子どもたちがそれぞれ自分の力のかぎりをつくそうとすること、そして、そこにアスランが関わっていくことによって『ナルニア国年代記』の魅力が生まれるといつてよいだろう。

(□) 魔女との闘い

復活したアスランは、ルーシーやスーザンとともに魔女の館に行き、石像たちに息をふきかけ呪いをとく。そして帰ってみるとピーターやエドモンドは魔女との闘いで苦戦を強いられている所だった。味方の動物たちは魔女の杖でつぎつぎに石に変えられた。エドモンドは身の危険もかえりみず魔女にうちかかり、その杖をうちこわし、重傷を負う。後をうけたピーターが魔女と闘っている所へアスランがとびかかってくる。アスランを見た魔女は恐怖と驚愕に顔を歪める。杖を失い、アスランの再度の出現を見て魔女は完全な敗北を喫して死ぬ。

今、戦いを終えてアスランと握手するピーターの姿がずっと大人びて見えることにルーシーは気づく。そして、傷の癒えたエドモンドも、又、ルーシーが見慣れていたエドモンドとは違って見えた。「彼は本来の自分自身をとり戻し、相手の顔をまっすぐに見ることのできる」少年になっていた。³⁹

ルイスは、エドモンドが悪くなったその一因が当時の学校教育にあるとしている。⁴⁰そして、この考え方は、この話の最初のほうで「どうしてこのごろの学校では論理を教えないのかな？」⁴¹と言ってルーシーを弁護したカーク教授の言葉と対をなすものである。

(□) 王位につくこと

戦いの翌日、子どもたち四人は、アスランに叙せられて、予言通りに王と女王になる。あれほど望んで手に入れられなかった王座に、エドモンドは自我を一切捨てた時につくことができた。

王や女王になるということは、登場人物が自己実現の過程で飛躍的な成長を遂げたことを示していると言える。⁴²アスランの助けがなければ、子どもたちは決して自己を実現することはできなかったのである。

このことを、ルイスは『キリスト教の精髓』の中で次のように言っている。

……わたしたちが「自己」というものを除去して、キリストに自己を支配してもらえばもらうほど、わたしたちはますますほんとうの自分になることができるのである。……われわれの真の自己はキリストの内においてわれわれを待っているのである。キリストなしで「自己自身」たらんと努めても無駄である。⁴³

子どもたちは成長しりっぱな大人になっていく。ピーターは背の高い厚い胸をしたりっぱな武人となり、ピーター大王と呼ばれる。そして、エドモンドは、兄よりも謹厳で静かな、知恵のある判断力の優れた青年になる。彼らはナルニアの国を正

³⁵ *The Lion*, pp.128-129.

³⁶ ミルトンの有名な「失明のソネット」の結句に「ただ立って待っている者たちも、また、神に仕えているのだ。」とある。

³⁷ 『ナルニアの国は遠くない』pp.67-72.

³⁸ 『C.S.ルイスの世界』p.104.

³⁹ *The Lion*, p163.

⁴⁰ 柳生直行、『お伽の国の神学』新教出版社、1984年、pp274-275.

⁴¹ *The Lion*, p.47.

⁴² 拙論、「英国昔話『夫がくれた三枚の羽』に関する覚え書き」『東京成徳短期大学紀要』第 14 号(昭和 56 年 3 月) p.69.

⁴³ 『キリスト教の精髓』pp.336-337.

しく治める。

(□)ナルニアからの帰還

ある日、白い鹿を追っていった四人はしげみの中で街灯を見つけ、あの衣装だんすの中に戻ってくる。着ていたものもいつの間にかもとに戻っていて、たんすに入っていた時間と同じ日の同じ時間だった。ナルニアと我々の世界では時間の流れ方が異なっているのだ。

そして、今までのことが夢でなかった証拠には彼らが着て行ってナルニアに置いてきた毛皮のコートが四つ、たんすの中から無くなっていた。

子どもたちから話をきいたカーク教授は、「ナルニアの国で一度王になったものはいつだってナルニアの王なんだよ。」⁴⁴と言って子どもたちを励まし、いつの日か、又、ナルニアに行けることを請け合うのだった。

ルイスは、教授の言葉を通して、『ライオンと魔女』がこれで完結してしまうのではないということを明らかにしている。

ここで我々は三つのことに注意しておきたい。その一つは、ルイスが登場人物やその住んでいた場所、そして時を具体的にある程度まで限定することによって、これが単なるおとぎ話や夢ではなく、現実に起こったことなのだ、という立場で語っていることだ。

第二に、一般のおとぎ話が、登場人物が王位についた所で完結することが多いのに対し、ルイスは、王位につくことを自己実現の一過程とし、新たなる成長段階への出発点として位置づけているということである。

最後に、子どもたちの成長はアスランの助けがあって初めて可能となるということだ。そして、アスランに支えられて子どもたちが力の限りを尽くす時、ナルニアに安寧と平和がもたらされるのだ。

⁴⁴ *The Lion*, p.170.